

女性 日本 人



大正九年九月〜大正十二年九月
全三八冊

全12卷

別冊総目録、解題付

佐藤 能丸 監修

株式会社 クレス出版

『女性日本人』

刊行にあたって

早稲田大学政治経済学部講師

佐藤 能丸

大正デモクラシー期は、女性文化が開花しようとした時代であった。明治期に初等教育がいきわたり、その上に中等教育や専門教育を身につけた女性が、大正期にかけて次第に増加して、一定の層をなしてきた。そして、この女子教育の普及と向上とともに女性の社会意識も高まった。また、女性の職域も広がって、女性が職場を通して社会に進出できる環境が形成された。そのような女性の増加が、それまでのマスメディアに一大異変を生じさせ、『青鞥』『婦人公論』『主婦之友』『女性』『女人芸術』等の個性ある婦人雑誌ジャーナリズムを族生させたのである。

そうした中で、『女性日本人』は、婦人総合雑誌として一九二〇（大正九）年九月に政教社から『日本及日本人』の姉妹誌として創刊された。

『日本及日本人』は明治中期以来の伝統ある総合雑誌で、ナシヨナリスト三宅雪嶺が主宰しており、『女性日本人』は雪嶺夫人の作家三宅花圃の主持で発刊され、以後一九二三年九月に終刊するまで三八冊を刊行した。

創刊号には、「女性が男性の助けるのを待ち、自ら助けることを忘るるのは、女性の地位を低くし、延いて男性活動の効力を薄くし、民族及人類の進歩を遅くします」とのいかにも雪嶺らしい創刊の辞につづけて、花圃が、「私達は運命の自由なる採択を欲する為に、女性の自由を束縛する、凡て

の社会制度を改造せなければなりません。自己を救ふものは自己、女性を救ふものは女性の外には無いのです。多くの日本の女性達よ、私達と共に創造の斧を揮って下さい」と訴えている。ここに、「改造」の時代に船出しようとする女性雑誌の強い志があらわされている。

本誌の目玉は「主張及批判」欄で、毎号、時事問題に鋭い論評が展開され、寄稿者には、平塚らいてう・山川菊栄・山田わか・神近市子・奥むめお・中条百合子・吉屋信子らの女性陣に加えて、吉野作造・権田保之助・大山郁夫・佐野学らの大正デモクラシー期をリードした錚々たる論客が多く、全体的に硬質の筆致が横溢している。

本誌は僅か三年間しかつづかなかつたが、婦人参政権・男女平等・生活改革・恋愛と貞操など多方面に目配りした重要な問題を取りあげるこ

とによって、女性自身の変革と、女性をとり囲む社会の改革に積極的な姿勢を示した。

大正デモクラシー期の全状況を説明するためには、非政治的な分野の研究が不可欠であり、従来知られることの少なかつた本誌の如き女性ジャーナリズムの活動の検討は、今後ますます重視されなければならないと私は思う。

注目される文学的所産

早稲田大学教授

榎本 隆司

柳田泉先生のお宅で教えを受けていた間に、よく雪嶺についての話が出た。逍遙や露伴とともに、哲人雪嶺を語られる先生の真摯な面ざしがその学びとられたことと合わせていまに鮮明だが、そんな折々に『女性日本人』にかかる視点を示されたことも記憶に新しい。

大正デモクラシーという時代の気運を負うてこの雑誌が担った役割は小さくないが、婦人参政権の訴えや、男女共学、男子大学の女子への開放等を含む女子教育の問題、男女雇用の平等、専業主婦の評価や男子の協力、さらには食生活の改善等々に及ぶ積極的な提言は、特に、現代の

諸課題を先取りするものとして、歴史的な意味の大きさをあらためて思わせる。

そして注目されるのは、この雑誌が残した文学的所産についてである。女流作家の草分けであつた花圃自身は、小説としては一篇を書いているだけだが、長谷川如是閑、野上彌生子、中川与一、中条百合子、坪内逍遙、網野菊、小川未明、加能作次郎ほかが創作欄に名を連ね、評論・感想等では、有島武郎、千葉亀雄、徳田秋聲、木下杢太郎、島崎藤村、吉野作造、内田魯庵、近松秋江、平林初之輔、幸田露伴らの名が目惹く。高村光太郎や日夏耿之介の存在を見逃すこともできない。ひろく大正後期の文学状況を知るに不可欠な多彩な顔ぶれが、そのまま本誌復刻の意義を証し立てている。

監修・解題を担当する佐藤能丸氏は篤学の人、三宅桃子氏また最適の方である。その成果をたのしみに、刊行を待ちたい。

若き知性がとらえた 大正婦人運動の実相

鹿児島県立短期大学助教

阿部 恒久

一九二〇年九月から関東大震災までの三年間という短い期間ではあつたが、三宅雪嶺の妻・三宅花圃が主宰し、三女淑子ら若き二、三の女性が編集を担った雑誌『女性日本人』が復刻されると聞き、喜んでい

る。『女性日本人』は「婦人の社会的政治的運動の広い意味での機関誌」を目指した。第一次世界大戦後の日本には、自覚的・組織的な社会運動が

さまざまな分野・階層でおこつたが、それは燎原の火のごとく凄まじい速さと広がりをもつた。この時期の婦人運動は、新婦人協会を先頭に大きな潮流を形づくり、豊かな広い裾野をもつていた。その裾野に咲いた都市中産階級の若き知性の花として『女性日本人』はある。

この時期の運動を支えた婦人雑誌として、新婦人協会の機関誌『女性同盟』や『婦人公論』『女性改造』などが知られる。しかし『女性日本人』の名は今日最も詳しい女性史年表である丸岡秀子・山口美代子編『近代日本婦人問題年表』（『日本婦人問題資料集』第十巻）にも見えず、忘れられた存在となつている。社会の中層というスタンス、雪嶺ゆずりのパランス感覚に限界があるかも知れないが、それもまた大切なことであり、彼女たちの心や眼を通して示される女性のあり様、問題状況は、当時の実相を伝えるものとして貴重であろう。ぜひ一読することを薦めたい。

女性日本人

初刊の辞

奇稻田姫が八岐の大蛇に吞まれる許りになり、素戔嗚尊に救はれたのは、希臘の神話にアンドロメダ姫がペルセウスに救はれたのと趣を同じくします。希臘はフェニキアより傳へ、源は巴比倫に出て、月蝕に基づくと断せられます。

世界で最も古い神話ながら、武者修業の講談に之に似た事が幾つもあり、歐洲の騎士時代も此類の挿話に富んで居ります。強い男性が弱い女性を危難より救ふべき者としての事であつて、實に女性は屢々男性の手で困苦災厄を免れて來ました。今も之を當然の事とします。

併し男性が助けて女性が助けられるのみではありませんか。代價を求めたり代價を拂つたりする事がありませぬか。眞に人道の麗はしいのがあり、神の手と思はれるのもありますが、適當の代價を求め、物品同様に擔保として取扱ふのが無いと言へますか。

人は相互扶助の性を禀け、助けもし助けられませんが、自助を重んずべき時代、他に助けられるよりも自ら助けるを順當とします。女性が男性の助けるのを待ち、自ら助けることを怠るのには、女性の位置を低くし、延いて男性活動の効力を薄くし、民族及び人類の進歩を遅くします。

今ならば奇稻田姫も徒らに老父老母と共に泣かず、何等か大蛇の禍を樂ぐに努められますまいか。



サンガー女史の「我子の性教育」

山川 菊 榮

緒言

—— 育教性の子我の史女—カンサ

(61)

世の父母に取つて生命と出生との事實を我子に教へるほど大切な、又興味ある問題はあらず。總ての母親は、自分の息子なり娘なりが何時かは成熟し、生殖の能力を持つて居ることに對してどういふないのである。生物學的に云ふと、重要な職分でありなが

も全然關はずに居るのである。種を維持する爲めに、自然は一切の動物に性的本能を與へた、此本能を恥かしく思ふのは人間のみである。人間は性的關係を續けながら、其子孫を制限する特權を使用する智力を持つ唯一の動物である。

或る少女の不思議な死

野上 彌生子

(146)

—— 死な 議思 不の 女少 或 ——



喜美子はこの三月十日の誕生日で満五才になる筈であつた。彼女はK家の一番末の娘で、家ぢうの皆んなに可愛かられてゐた。またK家は中々の大家内で、彼女の可愛がり手が澤山あつた。両親の外におぢい様もあれば、おばあ様もあつたし、姉さんたちが二人に、兄さんたちも二人あつた。殊にこの上、新たな小さい子供を持つてさうになつた母親は、いまだに赤ん坊に對するやうな愛し方で彼女を愛してゐた。彼女は毎晩母親に抱かれて寐た。喜美子の誕生日がもう二週間もすれば來るといふ頃であつた。或る夜、いつものやうに母親の床の中に眠つてゐた彼女は、夜中の二時頃にふと目を覺まして、お腹が痛いと言ひ出した。會つて盲腸炎を煩つて以來、腹痛に人一倍神経質になつて居る母親は、喫驚して何より先に子供の下腹部に手をやつて見た。しかしそれらしい特別なしこりもないことが分つた。ちよつとした食當りでもあつたらうと思ふと安心して、持薬の粉薬を一帖のませて、背中を撫でたり、お腹をさすつたりしてゐるうちに、喜美子は又うとうと眠つて行つた。母親も一緒に眠つた。二度目が覺めた時には、二月の寒い空が白くなつて、母親の起きる時刻になつてゐた。母親はよく寐入つてゐるらしく見える喜美子を驚かさないうやうに、そつと蒲團を抜けかけた。

§ 女性日本人 全12巻構成

12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
第四巻	第四巻	第四巻	第三巻	第三巻	第三巻	第三巻	第二巻	第二巻	第二巻	第二巻	第一巻
第六号〜第九号 (大正12年6月〜9月)	第四号、第五号 臨時増刊号 (大正12年4月、5月)	第一号〜第三号 (大正12年1月〜3月)	第十号〜第十二号 (大正11年10月〜12月)	第七号〜第九号 (大正11年7月〜9月)	第四号〜第六号 (大正11年4月〜6月)	第一号〜第三号 (大正11年1月〜3月)	第十号〜第十二号 (大正10年10月〜12月)	第七号〜第九号 (大正10年7月〜9月)	第四号〜第六号 (大正10年4月〜6月)	第一号〜第三号 (大正10年1月〜3月)	創刊号〜第四号 (大正9年9月〜12月)

中造本体裁・A5判／上製函入／クロス装
中配本予定(分売不可)

第一回配本

1〜5全5巻
揃定価七八、二八〇円(本体七六、〇〇〇円)
一九九二年十一月二十五日刊行

第二回配本

6〜12全7巻
別冊総目録、解題(佐藤能丸、三宅桃子)
揃定価一〇一、九七〇円(本体九九、〇〇〇円)
一九九三年四月二十五日刊行

全12巻揃定価一八〇、二五〇円(本体一七五、〇〇〇円)

§ クレス出版好評既刊、近刊

「家族・婚姻」研究文献選集

全38巻／別冊解題付 湯沢雅彦監修
人類社会において永遠のテーマであり、現在一般の関心も高い「家族」の問題を、それに係わる婚姻、親子、婦人、離婚等を含めてあらゆる分野から研究できるように精選集成したもの。
戦前篇 全15巻／別巻1 総七、八二〇頁 揃価一五八、六二〇円
戦後篇 全22巻 総七、六九六頁 揃価一八六、四三〇円

家庭教育文献叢書

全18巻 石川松太郎監修・解説
家族が家庭で子どもに基本的な養育と社会化を行う「家庭教育」は、子ども的人格形成に重要な役割をもち、教育の基本である。明治より昭和20年(終戦)まで発表された家庭教育を中心に、女子教育・幼児教育・生涯教育等の史料を纏め復刻。
A5判／総七、一五〇頁／揃定価一七五、一〇〇円

戦後婦人労働・生活調査資料集

全26巻／別冊附録付 高橋久子・原田冴子・湯沢雅彦監修・解題
昭和22年に労働省婦人少年局発足以来刊行されてきた「婦人労働調査資料」婦人関係調査資料」を中心に生の貴重な調査資料を纏め、民主主義社会における戦後30年の婦人労働の実態や婦人の生活と意識を伝える——日本女性史の貴重な証言集。
B5判／総一一、四六〇頁／揃定価三五〇、二〇〇円

婦人と新社会

全7巻 別冊総目録、解題付 山田わか主筆・五味百合子監修・解題
山田わか個人評論雑誌として、わかを主筆に、夫嘉吉を編集発行人として大正八年四月創刊され、昭和八年七月第一一〇号まで刊行されたものを復刻。婦人問題研究の宝庫であり、わか婦人問題は「愛」であるという主張が全号を通じて掲げられている。
平成五年二月刊 B6判／総五、一〇〇頁／揃定価九二、七〇〇円

